

パードゥレ・エテルノおよびサン・ヴィート・ヴェッキオ 洞窟教会壁画におけるマッセッロ法について

江藤望*

About the Massello Method in the Cave Church Fresco of Padre Eterno and San Vito Vecchio

Nozomu Etoh*

The thesis "On the Masello method in restoring the frescos of the Padre Eterno and San Vito Vecchio rock-cut cave churches", is a report on the use of the Masello method in dealing with the frescos of these cave churches. The Masello method is the oldest method of fresco preservation, and involves cutting both the fresco and wall body behind it into blocks which can then be removed and relocated. The frescos of both of these churches have been moved and restored in this way for their preservation. This report inspects the actual method and order of the supposed fresco movement through the block division visible in the frescos themselves, and the traces of their excavation that remain in the churches.

Key Words: Cave church, Fresco, Massello, Restoration, Gravina in Puglia

キーワード: 洞窟教会, 壁画, マッセッロ法, 修復, グラヴィーナ イン プーリア

1. マッセッロ法が採用された理由

今回の調査対象であるパードゥレ・エテルノおよびサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画は、マッセッロ法によって移設された。マッセッロ法とは壁画を建築物の壁体ごと取り外し、ブロック移動する保存技術である。古くは1561年にフィレンツェのオンニサッティ教会で、ドメニコ・ギランダイオとボッティチェルリの壁画がこの方法によって保存された¹⁾。また、18世紀初めには同じくフィレンツェにあるフェラガモ宮殿の天井フレスコ画（ベルナルディーノ・ポチェッティ作、1611）が礼拝堂とともに移設されている²⁾。

この壁体ごと、いわば強引に移動するマッセッロ法では、壁画を運べる大きさに切断しなければならない。しかも石や煉瓦を積まれた支持体が崩れないように、鉄枠で頑丈に固定する大がかりな作業が必要となる。したがって、移動するブロック区分が必然的に小さくならざるを得ないのである。

18世紀に入ると新しい壁画の移動技術が開発された。それは、壁画面のアリッチョという下塗り漆喰から上塗り漆喰であるイントーナコの層だけを剥がす方法で、スタッコ法と呼ばれる。この移動法は、1725年にナポリでアントーニオ・コントリによ

っておこなわれた仕事が最初の記録として残っている³⁾。スタッコ法は、支持体ごとブロック移動するマッセッロ法に比べると、労力は大幅に軽減され壁画を損傷する危険性も少ない。しかし、この方法でも壁画を分割することは避けられない。

その後、壁画移動の技術はさらに進歩し、分割せずに広い画面のまま一度に剥がせる保存方法、ストラッポ法が誕生した。この技術は描画面の表層のみを剥ぎ取るもので、1980年以前までは多くの壁画がこの手法で移設された。現在ではできるだけ建造物から剥がさない方向で保存修復がなされており、壁画の支持母体となる建築物が崩壊の危機に晒されるなど、壁画に危険がおよんだ場合に限り、ストラッポ法による壁画移動がおこなわれる。

さて、壁画にとっては危険極まりない保存技術であるマッセッロ法であるが、パードゥレ・エテルノおよびサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画移動に際しては、なぜこの方法が採用されたのだろうか。マッセッロ法の利点を強いて言うならば、壁画の量感的存在感や漆喰壁の実在感を保てることだろう。しかし、この理由だけで同法が採用されたとは言い難い。両教会の壁画移動は、1957年にローマ中央修復研究所によって実施されたことがわかっている⁴⁾。この時期にはまだストラッポ法が開発途上であったとしても、両教会の壁画も漆喰が塗られた上に描かれたものであるため、十分スタッコ法による壁画剥がしは可能だったはずである。事実、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の右側壁の後陣側に15世紀に描かれた「聖マルティヌス」の

* 人間社会学域 学校教育系
フレスコ壁画研究センター

* Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Education
Research Center of Italian Mural Paintings

壁画の主要部分が、ディスタッコ法⁵⁾によって剥がされている。(Fig.16)

この疑問に対して手がかりとなるのが、壁画の支持体となる凝灰岩にあると考えられる。調査地であるグラヴィーナ・イン・ブーリアには広大な凝灰岩台地が広がり、この岩盤を掘削してつくられた多くの洞窟教会が存在する。調査対象の両教会も同様の手法でつくられており、壁画は凝灰岩の壁体の上に漆喰が塗られて描かれたものである。つまり、先に紹介したフィレンツェにおけるマッセッコ法の例とは、支持体の性質が大きく異なり、その分解を避けるための固定は必要としない。何らかの補強は必要だったとしても、石積み等の支持体に比べると簡易なものだったに違いない。

また、凝灰岩台地の石質は比較的軟らかく、素人でも簡単に石切り鋸で切断することが可能である。この地方の人々は古くからこの台地を切り開き、街を形成していった。地下深くには蟻の巣のごとく住居や倉庫などが張り巡らされ、その造成過程で産出された凝灰岩ブロックが、地上の建築材として有効活用されてきた。この地域にとって凝灰岩は重要な建築資材であり、当然、凝灰岩を加工することに慣れた石工職人たちが多く存在する。つまり、この人的環境を活用してマッセッコ法がおこなわれたと考えることができよう。

1958年、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画がローマ中央修復研究所の監督下によって移設された際、修復士たちによるディスタッコ法よりも、凝灰岩の加工に熟達した地元の石工職人の手を借りたマッセッコ法を採用した方が断然、安全にしかも低コストでおこなえたに違いない。実際、両教会に残る壁画移動のための掘削痕からは、石工たちの巧みな加工技術が生き生きと伝わってくる。(Fig.1) さらに、壁画を取り外した後の修復士による保存処置に関しても、支持体の余分な凝灰岩を容易に削り取ることができ、他の軽量の補強剤で裏打ちすることで壁画の重量が軽減かつ補強されるので、以後の保存にも有効となる。

このように、壁画移動に際してマッセッコ法が採用された主な理由は、①支持体が加工しやすい岩盤状の凝灰岩が支持体であることで、移動するブロックサイズを広く取れること、そして②壁画の支持体である凝灰岩を容易に加工することが可能な人的環境が整っていたこと。以上の2点が挙げられる。



Fig.1 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の掘削痕（後陣壁）

2. パードゥレ・エテルノ教会

2.1 マッセッコ区分

パードゥレ・エテルノ教会の壁画は、エットーレ・ポマルチ・サントマジ財団博物館に移設、復元されたサン・ヴィート・ヴェッキオ教会の展示室近くの小展示室に、一切の解説がない状態で常設されている。今回の調査開始当初、この小展示室の壁画がパードゥレ・エテルノ教会のものであるか、当博物館の学芸員ですら不確かであったが、新たな文献の発見と計測調査によって、この教会のものであることが明らかになった。

同博物館に移設されたパードゥレ・エテルノ教会の壁画は、損傷が激しかったためか移設されていない後陣壁中央のパントクラトールのキリスト部分が空隙に保たれ、その右に「助祭」⁶⁾左に「聖ニコラウス」、右側壁に1聖人、囚人の聖人といわれる「聖レオナルドス」、対する左側壁に2聖人、左が「聖ペテロ」で右の聖人は明らかになっていない。以上、合計5人の聖人および聖職者の壁画が設置されている。展示された壁画の位置関係は移設前の状態を復元したものと見て取れる (Fig.2)。

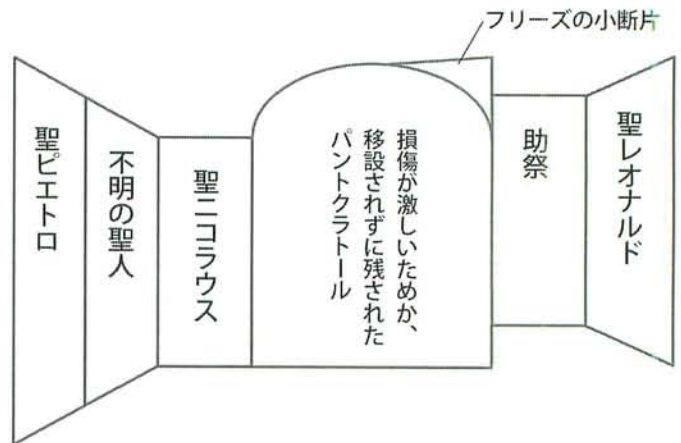


Fig.2 礼拝堂見取り図

	壁面	図像	サイズ(縦×横cm)
1	右側壁	聖レオナルドス	約 203×70
2	後陣壁	助祭	約 203×72
3		フリーズ	横幅約 42
4		聖ニコラウス	約 204×77
5	左側壁	不明の聖人 聖ペテロ	約 206×154

Table 1 パードゥレ・エテルノ教会壁画のマッセッコ区分

さて、移設された壁画を目視調査したところ、マッセッコ法でブロック移動した際の切断箇所が確認できた。切断に際して使用された工具の刃幅による画面の損傷箇所を修復過程でつなぎ合わせているが、この箇所を補填剤で補い、さらにその上から補彩による修復が施されている。この継ぎ目と補彩された修復の跡をマッセッコ時のブロック区分と捉え、その痕跡を辿ったところ、次のとおりであった (Table 1)。

右側壁に描かれたレオナルドゥスの画面で1ブロック。後陣壁のキリストが設置されるべき空隙部分に対して、右側の助祭画面で1ブロック。同じくキリストの右上部にあるマンデルラのフリーズの小断片で1ブロック。キリスト左側のニコラウス画面で1ブロック。そして、左側壁のペテロと明らかになっていない聖人で1ブロック。以上の5ブロック (Fig.3~5) に切断され移動がおこなわれたと考えられる。



Fig.3 左側壁 聖ペテロと不明の聖人 (左)



Fig.4 右側壁聖レオナルドゥス (右)



Fig.5 後陣壁 聖ニコラウス (左)・フリーズの小断片・助祭 (右)

2.2 マッセッロの方法と順序

2.2.1 右側壁

次に、上記で述べたマッセッロ区分をどのような方法と順序で壁体から取り外し移動したのか、壁面に残された掘削痕をもとに検証する。まず、後陣に向かって右側壁から見ていくことにしよう。

マッセッロされた掘削痕の右端を見てみると、ほとんどが壁面に平行して入っているのに対し、掘削痕Aは、壁面に垂直に入っているのが分かる (Fig.6)。刃先が約5cm程度の鶴嘴のような工具で、上から振り下ろされた跡が残っている。もし、こ

の位置に壁面があったとすれば、もちろん損傷は免れない。移設後の展示を見ても、右側壁には横幅が約70cmのレオナルドゥス画面のみだったと考えられるので、ここに描かれていたとは考えにくい。おそらくこの掘削痕Aは、壁画の裏側を掘り進めるうえで、奥行きを確保するために最初に掘られたものと考えられよう (Fig.6 参照)。

この壁面に対して垂直の掘削は、横幅、奥行きとも最低でも人1人が入れるスペースを確保する必要がある。なぜならその後、石工が壁面の裏側に入り込んで掘り進めていかなくてはならないからである。しかも工具を使用する必要があるため、そのスペースも考慮に入れなければならない。計測の結果によると、壁画の右端からおおよそ幅80cmで奥行き約50cmの深さで掘り進んだ後、次に、壁画の厚さを10cm残したとして⁷⁾、壁画の裏側を右から左へと約40cm幅で掘り進んだことになる。掘る過程で、上部を作業するための足場を確保している。また、右上に外部と貫通する穴があるが、これは真っ暗な壁画の裏側を掘り進める時の明かり取りではないだろうか。同様のものが左側面上部にも確認できる。

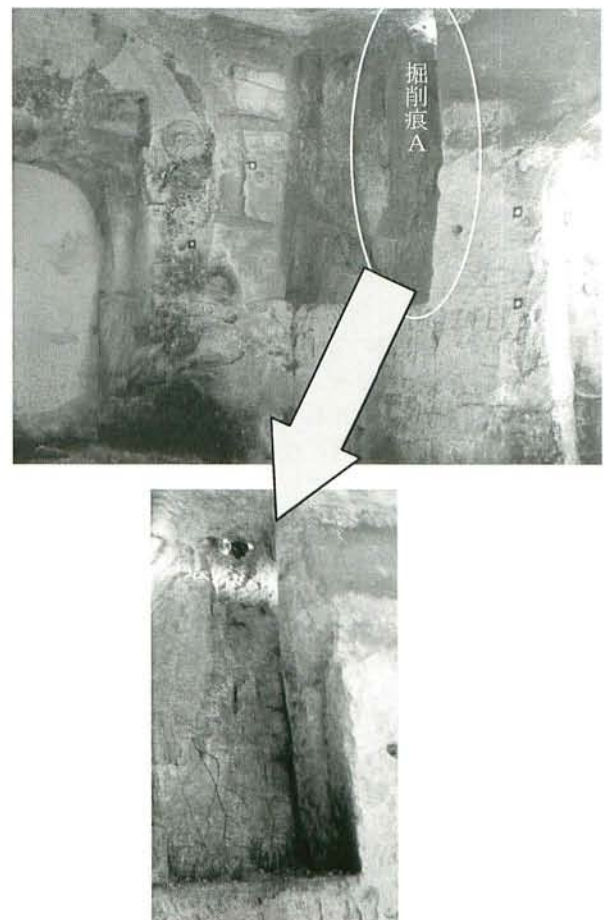


Fig.6 右側壁における奥行きを確保する最初の掘削 (掘削痕A) 掘削痕Aの上部には明かり取りと思われる外部と貫通した穴が見られる。

壁画の裏側が削り取られた後は、壁体と接続する上部、底部および左側の縁の切断がおこなわれた。再上部に関しては、それより上に壁画がないので大胆に鶴嘴が入れた様子がかえすが、左側面に関しては、後陣右側の助祭像とほぼ直角に接しているの、両方の壁画に損傷を与えないように慎重に切断されたに違いない。

以上見てきたマッセッロの方法、つまり Fig.6 で図示したやり方は、本教会の他の壁面でも同様で、さらにもう一つの調査地であるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会においても基本的には同じ手法が採られている。

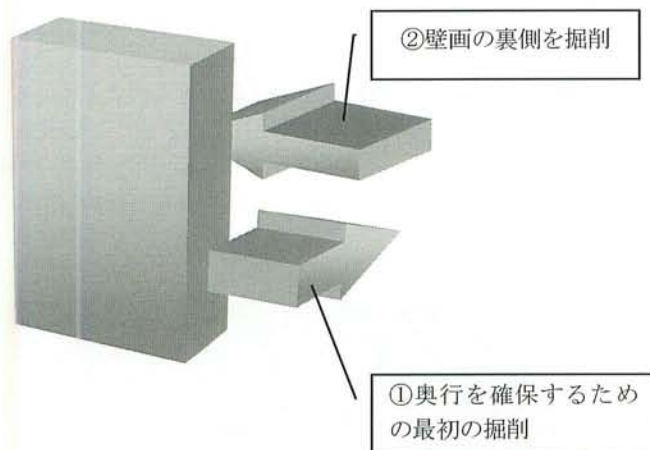


Fig.7 マッセッロ法のための基本的な掘削方法

2.2.2 左側壁

左側壁には、先述した2人の聖人壁画が壁面と同じ幅で存在した。つまり、左側壁の横幅いっぱい壁画が描かれていたことになる。したがって壁画の左縁がそのまま左側壁のコーナーとなるので、右側壁で存在した奥行きを確保するための掘削は必要なく、左側壁から直角に続く壁面を掘れば、直ちに壁画の裏側を掘ることができたのであった。しかも壁画裏側の奥行きは十分に確保されるので、洞窟教会そのものを保存するという点では問題があるが、右側壁に比べてかなり大胆に壁画の裏側を掘削した形跡が残っている。もっとも、左側壁の壁画は右側壁のもの倍の大きさをブロック移動する必要があるの、作業空間をより広く取る必要があった。また、右側壁の壁体は厚さが十分でなく、外部との貫通を懸念したからなのかもしれない。

左側壁では壁画の厚みを10cm残したと仮定すると、約70cmの幅で壁画の裏側が掘削されたことになる。右側壁の約30cmに対して倍以上の幅である。左側壁に描かれた壁画の横幅が最大で154cmなので、少なくともその分の奥行きを確保する必要があった。右側壁の場合は聖人1人分の画面なので約半分の70cmでよく、石工が壁画の裏側に入り込まなくても工具が十分届く範囲であった。しかしその倍の154cmとなると、入り込んで掘削していかなければならない。さらに、工具を振り回すスペースが必要であるため、奥に行くほど徐々に掘削空間が広がっていることがわかる。

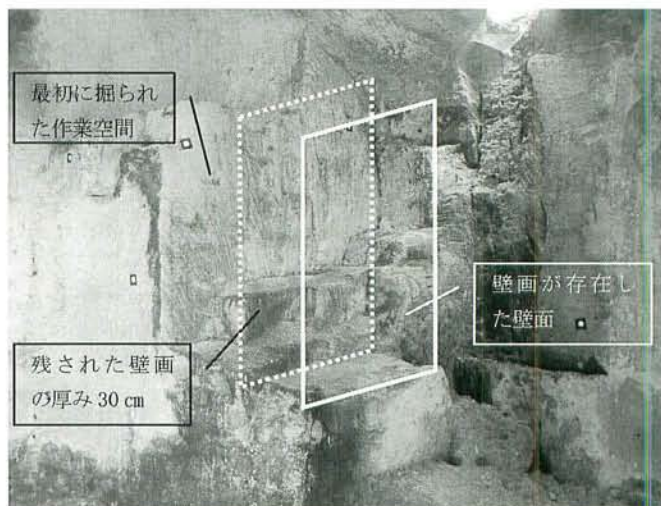


Fig.8 左側壁の掘削

では、右側壁と同様に壁画の厚さを約10cm程度確保して掘られていったかということ、そうではないようだ。屋外が接近する右側壁と違って岩盤が続く左側壁では、掘削できるスペースが十分確保できた。そのため、足場にしたと思われる階段状のもの側面を境に、壁画の厚みを30cmほど残して、それより奥側を作業空間として最初に掘られたと思われる。その後、壁画の裏側を上から削り取り、全体を移動可能な厚さにして運んだと想定できる (Fig.8)。

以上のマッセッロ法における工程および作業空間から考えると、掘削に直接かかわった石工の人数は、右側壁では1人と推定されるが、空間が十分確保できる左側壁に関しては、複数人、少なくとも2、3人でおこなわれたはずである。



Fig.9 損傷がひどい後陣壁

中央にはかつて外部との通路に使われた穴が塞がれている。左上には光取りのためか屋外と貫通する穴が開けられている。

2.2.3 後陣壁

後陣壁における壁画の取り外しに関しては、両側壁に渡って描写が隙間なく連続するため、側壁部分が終わらなければ取りかかることができない。先述したが、後陣壁のパントクラトールのキリストは無残に破壊され、キリストとその両脇に聖人が1人ずつ描かれているが、彼らの顔にはひどい損傷を受けている。キリストの玉座の部分は通路として使われたのか、巨大な穴が空けられた跡がある。そのためか、移設されずに教会内に残されたままとなっている (Fig.9)。ここでは移設された、後陣の両脇に描かれた聖ニコラウスと助祭の壁画、そしてフリーズの小断片、以上の3ブロックについて報告する。

後陣右側では、助祭と後陣を囲むフリーズの一部がブロック移動された。助祭画面のブロック移動には、右側壁の壁画、レオナルドゥス画面が外された後の掘削をさらに掘り進めることで、画面裏側を掘り込むための奥行きを確保している。その後、壁画の厚みを10cmほど残し、左右の側方から切断面に沿って鶴嘴で刻みを入れた痕跡が残っている。そして、最上部、全体の3分の1及び3分の2の位置に切断工具を差し込むためと思われる痕跡が3ヶ所左右に通っており (Fig.9)、それらを利用して壁画の背面が切り取られたようである。⁸⁾

助祭画面が移動された後、フリーズの断片へと作業が進んだ。なぜなら、断片の上部の掘削痕を見ると、右側から工具が入られた痕跡が見られるからで、助祭画面が済まない、その方向からの掘削は不可能である。断片上部の左右に貫通されたくぼみが認められるが、ここに鋸切りを入れて切り取られたと考えられる。



Fig.10 後陣壁左側 (聖ニコラウス画面) の掘削痕B

後陣左側の聖ニコラウスの壁画に関しては、右側の助祭画面による方法と基本的には同じである。左側壁で掘削された穴を利用して、壁画の裏側を掘り込むための奥行きを確保している。次に左側から壁画の厚みをおよそ10cm程度保った位置に細い鶴嘴で縦に刻み (掘削痕B) を入れてある。その深さは深いと

ころで約30cmに及ぶ。その後、最上部に鋸切りを通す穴が掘られ、そこから一気に下まで切断されたと考えられる。助祭画面では鋸切りが差し込まれる穴が3ヶ所確認できたが、ここでは最上部の1ヶ所のみである。おそらく、助祭画面に関しては、フリーズの断片があるためその部分に関してのこぎりの長さが足りなかったためではないか。もしくは、最初の助祭画面では慎重を期しておこなわれ、その経験に基づき左側のニコラウス画面では一気に切断することが可能だと判断されたのかもしれない。

3. サン・ヴィート・ヴェッキオ教会

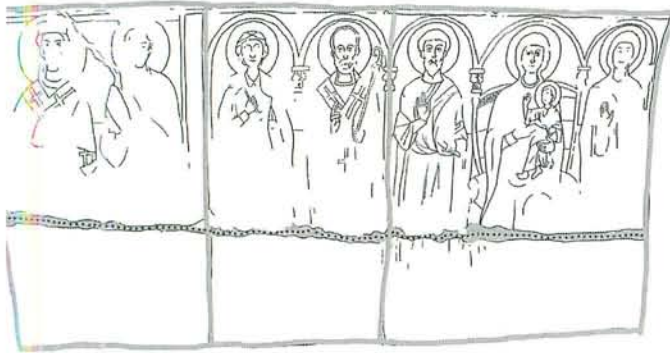
3.1 マッセッロ区分

パードゥレ・エテルノ教会のものと同様、ブロック移動時の切断による継ぎ目と補彩された修復の跡をマッセッロ区分と捉え、その痕跡を目視で辿ったところ、次のとおりであった。

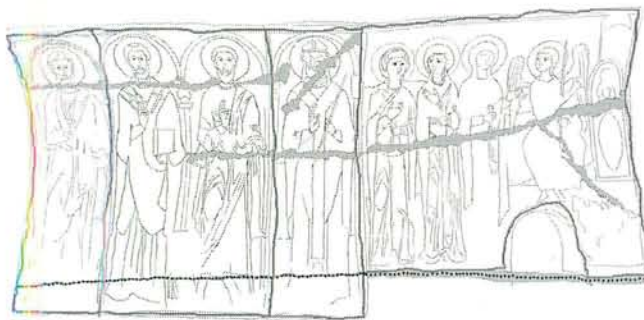
右側壁のファサード側から見ていくと、「アレクサンドリアの聖女カタリナ」、「幼児キリストを抱く聖母マリア」、「聖バルトロマイ」の3聖人で1ブロック。続いてバーリの「聖ニコラウス」、「聖女マルガリタ」の2聖人で1ブロック。そして、損傷の激しいおそらく「聖コスマス」と「聖クリュソストモス」と思われる2聖人で1ブロック。以上、マッセッロ区分は3ブロックであった (Fig.11)。

Table2 サン・ヴィート・ヴェッキオ教会壁画のマッセッロ区分

	壁面	画像	称号	サイズ (縦×横cm)
1	右側壁	聖女カタリナ 聖母マリア 聖バルトロマイ	右③	約226×210
2		聖ニコラウス 聖女マルガリタ	右②	約226×120
3		聖コスマス 聖クリュソストモス	右①	約226×136
4	後陣壁	フリーズ (右)	—	—
5		フリーズ (左)	—	—
6		キリスト上半身	—	—
7		キリスト右足	—	—
8		キリスト左足	—	—
9		天使 (右上)	—	—
10		天使 (右下)	—	—
11		天使 (左上)	—	—
12	天使 (左下)	—	—	
13	左側壁	聖ペテロ	左①	約203×58
15		聖ラザロ 聖ヤコブ	左②	約203×132
16		聖バシリウス	左③	約203×64
17		墓の前の天使 3人のマリア	左④	約177×206



右③ 右② 右①
Fig.11 右側壁のマッセッロ区分



左① 左② 左③ 左④
Fig.12 左側壁のマッセッロ区分



Fig.13 後陣側壁のマッセッロ区分
… 点線の部分は教会全体に入る自然断層による亀裂

次に対面する左側壁では、入り口側から「聖ペテロ」で1ブロック。「聖ラザロ」と「聖ヤコブ」の2聖人で1ブロック。そして「聖バシリウス」の1聖人で1ブロック。最後に、「墓の前の天使と3人のマリア」で1ブロック。以上の4ブロックであった (Fig.12)。

最後に後陣壁であるが、形状がドーム形に湾曲しているので、マッセッロ区分は複雑に分けられており、その数はフリーズ部分を含めると9を数える。まず、フリーズ部分は、盗掘による巨大な穴を境に2つに分けられる。左側のフリーズは右側のものに比べるとかなり長く取られている。「玉座に座るパントクラトールのキリスト」を見てみると、キリストの光輪上半分を辿り玉座の背もたれの両端を伝い右腕から腹部を経由して左肘にいたる部分で、キリストの上半身が1つのブロックとされている。下半身はほぼ真ん中から継ぎ目が真下に下りており、それによって右足と左足が別々のブロックに分かれる。キリストの両脇では4人の天使がマンデルラを支え合っているが、それぞれが1つのブロックとして区分される (Fig.13)。

さて、これまで目視によるマッセッロ区分を見てきたが、これにしたがってブロック移動がなされたかという点、そう単純にはおこなわれていない。なぜなら、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会を形成する岩盤層には全体に連なる断層の亀裂が存在し、この自然に生じた亀裂をマッセッロ区分として利用した可能性が考えられるからである。次節で、ブロック移動の手順を検証するが、この断層亀裂を考慮に入れる必要である。

また、左側壁のマッセッロ区分が不規則に区分けされていることに気づくだろう。右側壁では7人の聖人像を、最初に切り出されたと思われる右側から、3聖人、2聖人、2聖人と、比較的大きな面積で分割されているのに対し、左側壁の4聖人に関しては、1聖人、2聖人、1聖人と狭い面積で不規則に分割されている。右側壁に倣えば2聖人ずつに分けるのが適当と思えるが、そうはなっていない。おそらく壁面に生じた複数の亀裂が大きく関係していると想定されるが、これについては次節での重要な検証課題となる。

3.2 マッセッロの方法と順序

3.2.1 掘削工具

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会における掘削痕は、パードゥレ・エテルノ教会のものとは明らかに異なる。後者では、先述したとおり鑿や鶴橋といった人力による工具を使用しているのに対し、前者では、ディスク・グラインダーのような電動工具が主に使われている。この使用工具の違いは、凝灰岩の石質によるものと思われる。修復士のロベルト・カリタの書簡⁹⁾に、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の石質の硬さが作業の遅れを生じさせたとの記録が残っている。

このように、両教会における掘削道具に関しては違いを見せているものの、掘削方法に関しては Fig.7 で示したものと概ね同じ手法を採っている。つまり、壁面の傍らを壁面に垂直に掘り進み奥行きを確保した後に、画面の裏側を一定の厚みを残して壁面と平行に掘削する方法である。それでは掘削のプロセスを右側壁から検証することにしよう。

3.2.2 右側壁

奥行きを確保する最初の掘削（掘削痕C）は、向かって左側の後陣側に確認できる（Fig.14・15）。そこから右側の掘削痕は壁面と平行して右へ移動する。後陣右上に大きな穴が開けられているが、これは盗掘によって開けられたものと考えられている。左から掘り進めた理由の一つとしては、この穴を明かり取りとして利用したからではないか。電源がとれない場所において、壁画の裏側を掘削する際には明かり取りが大変重要になる。もう一つの理由としては、右側壁には入り口近くまで壁画が描かれていたと想定されるため、奥行きを確保する最初の掘削を右側でおこなおうとすると、ファサード裏側の壁面が間近で壊さざるを得なくなる。教会の外観を損なう危険性を避けたことも、大きな理由としてあったと考えられよう。

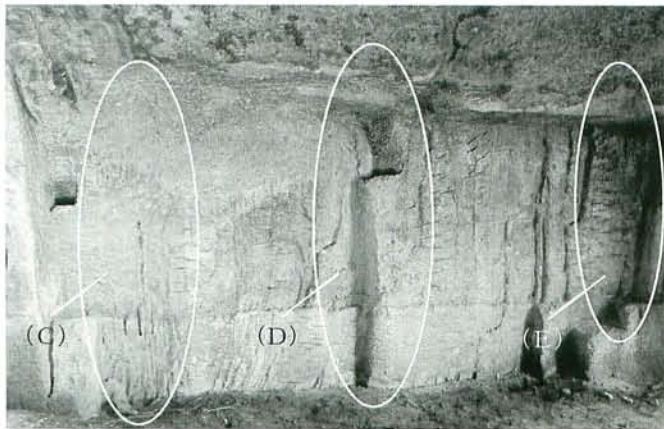


Fig.14 左側壁の掘削痕 左からC, D, E



Fig.15 奥行き確保のための最初の掘削 壁面に対して垂直に掘削されている（掘削痕C）

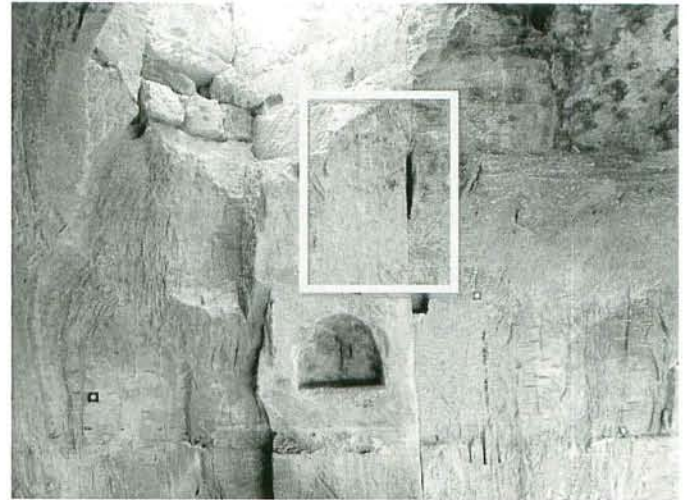


Fig.16 聖マルティヌスの壁画があったとされる位置（右側壁）

しかし、左側から掘削するにしても問題があった。奥行きを確保するための最初の掘削の場所には、15世紀に描かれた「聖マルティヌス」のフレスコ画があった。この壁画の主要部分が先述のとおり、ディスタッコ法によって剥がされており（Fig.16）、その壁画が移動された後に「聖コスマス」と「聖クリュストモス」の2聖人（右③画面）をマッセッロするための奥行きを確保する最初の掘削（掘削痕C）がおこなわれたはずである。「聖マルティヌス」の壁画が一部分のみしか保存されなかった理由は定かではないが、損傷が激しかったからなのか、もしくは移設する博物館の展示空間に限りがあったからなのか、疑問が残る。これに関しては測量チームの報告に委ねたい。

さて、上記ディスタッコ法に続きいよいよ右③画面のマッセッロ法に入ることになる。奥行き確保のための掘削痕Cは、計測によると横幅90cmで奥行きは約50cmであった。このスペースは、石工が工具を使って壁面に対し右向きで作業できる空間であり、ここから壁画の裏側を教会入り口方向へと掘り進められた。壁面と平行に走る掘削痕の途中にクランクの形状をした大きな段差（掘削痕D）が存在するが、掘削痕CからDに至るまで、奥行きが徐々に深まっている。これは壁面の裏側を掘り進めていく上で、石工が壁面を傷つけまいとする心理の表れなのか、奥まっていけばいくほど掘削作業が困難になり作業スペースを必要とするためなのかはわからないが、ここに限らず他の多くの場所で同様の例を見ることができる。そして、ちょうど掘削痕Dの付近が右③画面を他から分断した場所と考えられる。計測結果を見ても、掘削痕CからDまでの間が約1.6mで、横幅が約1.4mの右③画面が入ることになる。

右③画面が移動された後、「聖ニコラウス」と「聖女マルガリタ」の壁画（右②画面）のマッセッロに続くが、この場合にはすでに右③画面が取り外されているので、右②画面を掘り進める作業スペースは充分にとれる。そのため、これまでの堀幅よりも狭い幅で掘り始められており、この痕跡が先の掘削痕Cとなって残っているのである。しかし堀幅は右①の場合と同様、掘り進めるにしたがって徐々に広がっている。

右側壁最後の「アレクサンドリアの聖女カタリナ」, 「幼児キリストを抱く聖母マリア」, そして「聖バルトロマイ」の壁画(右①画面)は, これまでと違って3聖人が描かれた最も大きいブロックである。ここの掘削に関しては, 左側に加えて右側からもおこなわれている。これ以上壁画が続かないためか, 想定される画面右縁の位置からファサード裏側の壁面にまたがる約40cmの隙間に, 壁面に対して垂直に掘られた掘削痕Eが認められる(Fig.17)。この掘削で取り外す壁画の厚みにプラス α の奥行きを確保し, 右方向からも画面裏側を切り離す作業がおこなわれたと考えられる。そのため, このブロック部分に関しては切り離し作業が画面の両側からおこなわれたので, 壁面裏側の掘削が幾分省けたようで階段状になった凝灰岩の塊¹⁰⁾がそのままに残っている。



Fig.17 右側壁の右隅にある掘削痕E

3.2.3 左側壁

左側壁の場合は, 右側壁に比べるとかなり困難だったことが複雑な掘削痕から想像できる(Fig.18)。また, そのことは先述したマッセッロ区分を見ても明らかで, 右側壁のように2から3聖人で効率的に分断すればいいものを, 1聖人, 2聖人そして1聖人と, 4人の聖人像を複雑に3つのブロックに分けている¹¹⁾。このように切断箇所が増す方法をあえて採用していることから, 壁画移動が難航したことは明確だ。

ブロック区分を複雑にせざるを得なかった原因は, 壁面に生じた複数の亀裂¹²⁾にあると考えられる。無惨にもペテロ, ラザロ, ヤコブの3聖人を斬首する亀裂(I), もう1人の聖人パシリウスの頭部に入る斜めの亀裂(II), ラザロ, ヤコブ, 3人のマリア, そして墓の前の天使, これらの像の上半身と下半身を分ける長い亀裂(III), そして天使の下半身を斜めに横切る亀裂(IV), 以上の4本が確認できる(Fig.20, 21)。これらは表層のみに生じたものではなく岩盤の奥まで続くものと推定され, しかも壁画の上部は前方にせり出しているため, 壁画の裏側を切り離す過程で崩落を防ぐ細心の注意を払う必要があったはずである。この複雑な壁画移動の工程を, 次に検証することしよう。



Fig.18 左側壁における掘削痕F(左)とG(右) 右下には足場に使われた階段状のブロック痕(掘削痕H)がある。



Fig.19 掘削痕F

左側壁における奥行きを確保する掘削は, 教会入り口側に確認できる。Fig.18に示した掘削痕Fがそれであり, 壁面に対して垂直に入っている。また, 想定される壁画の位置¹³⁾からも, これが奥行きのための掘削であることは間違いない。ただ, この掘削痕Fの下の部分に, 足場として使われた凝灰岩のブロックがそのまま残されている。他の例から見ると, 最初の掘削がおこなわれた後に, 石工が壁画の裏側に潜り込んで作業する必要があり, 足場として使用された部分も全て掘削されたはずで

ある。しかし、この部分の壁画、つまり聖ペテロの画面(左①)は他のマッセッロ区分と比べると比較的小さく、聖人1人分の横幅約60cmで切り離されているので、石工は潜り込まずに画面の左側方からでも十分に作業ができた。そのため、足場部分の掘削をせずとも作業スペースは確保できたと考えられる。

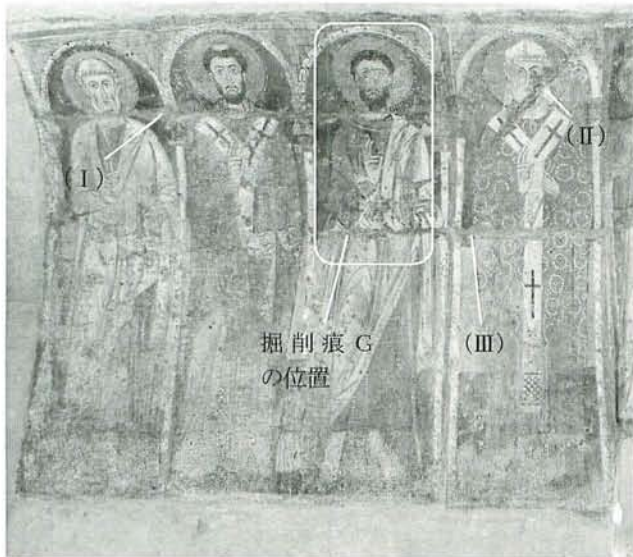


Fig.20 4聖人の画面に入った亀裂(亀裂I, II, III) 聖ヤコブの上半身部分と同位置には掘削痕Gが存在する



Fig.21 天使と三人のマリアを横切る亀裂IIIと天使の左足に斜めに入る亀裂IV

左①画面のマッセッロ区分を小さくせざるを得なくした原因が、聖ペテロの首に生じた亀裂Iにあると推定される。この亀裂は次に続く聖人ラザロとヤコブにまでおよんでおり、3聖人も胴体と分断されている。さらに、先にも述べたが、この部分はかなり前方にせり出しており、壁画というよりも天井面に近いほどの位置にある。したがって、画面側に何らかの支えを設置して壁画の裏側を切り離さなければ、落下する危険性が

あったのである。このため、慎重を期して聖ペテロのみの1聖人分でマッセッロがおこなわれたと推測できる。

左②画面におけるラザロとヤコブのブロックでは、亀裂Iに加えヤコブの腹部に入る亀裂IIが石工たちをさらに困らせたようだ。掘削痕Gがそのことを鮮明に伝えている(Fig.18, 22)。この掘削痕は計測結果からちょうどヤコブの上半身の位置と一致する(Fig.20)。つまり、亀裂IとIIIが混在する部分で、壁画が分解する恐れのある特に危険な場所なのである。掘削痕Gの周辺を見てみると、この部分をくぐるように掘削がおこなわれた形跡が認められる(Fig.18)。これは、ヤコブの上半身を切り離す前に聖バシリウスの画面(左③)裏側の掘削に及んだことを証明している。ただ、バシリウスの上半身にも亀裂I, IIIに加え亀裂IIの3本が確認でき、左②画面と同様に危険極まりない状態であったことは明らかだ。おそらくこの左③画面に関しても、掘削痕Gが落下防止の重要な支えとなったと考えられる。亀裂による画面の分解と落下を防ぐため、壁画を壁体に維持させるための支えである。この掘削痕Gが最後に切り離されたと仮定すると、左③の画面を先に取り外した後に、この支えの両側から切断工具を入れて左②の画面を切り出したと考えられる。



Fig.22 左②, ③画面の支えとなっていた掘削痕G この部分が最後に切り離されたと想定される。

4人の聖人壁画が取り外された次に「3人のマリアと墓の前の天使」(左④)の作業へと移るわけだが、ここに関しても亀裂IIIとIVが石工たちを困らせたに違いない(Fig.21)。前述したマッセッロ区分ではこの壁画内には切断された形跡が見あらず1ブロックとしているが、実際は亀裂IIIの上下で分断して壁画が移動された可能性が高い。しかも上の部分はせり出しが強く、上下を同時におこなえば倒壊する危険性を招く。左④画面における亀裂IIIより上の部分は、縦幅が80cm前後で横幅は2mにわたる。この大画面を厚さ約10cmの凝灰岩の壁体とともに削り取るとなると、前面に必ず何らかの支えを設ける必要があったはずだが、その具体的手法は定かでない。

3.2.4 後陣壁

後陣壁の掘削痕を見ると、左右両側から中心に向かって掘り進められたことがわかる (Fig.23)。想像の域を超えないが、掘削に携わった作業班は2グループで編成され、それぞれが同時に左右の側壁を掘削し、これらが終了した後に後陣壁に取りかかったはずである。左側壁の作業班は左④画面、つまり「墓の前の天使と三人のマリア」の壁画が外された後、そのまま後陣壁へと作業が継続されたとみられるが、右側壁の作業班に関しては、ディスタッコされた「聖マルティヌス」の壁画が間にあり壁画が連続していない。そのため、改めて奥行きを確保する掘削が必要であった。実際、その掘削は後陣壁の右端下のみ確認でき、上部における奥行き掘削は、すでに盗掘により掘られたとされる巨大な穴を利用している。

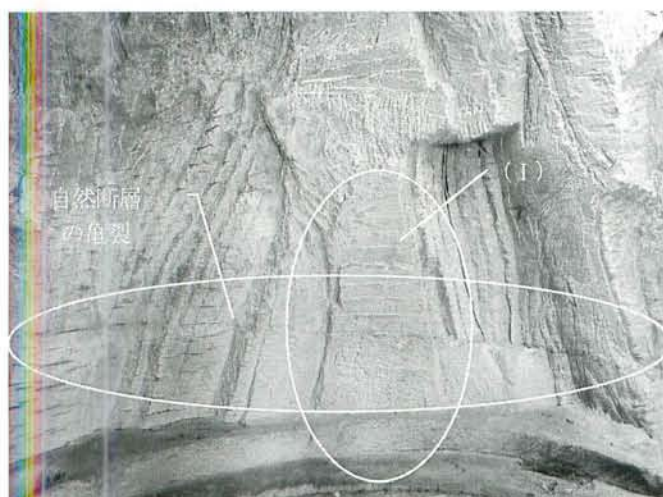


Fig.23 後陣壁の掘削痕

中央付近には最後にマッセッロされたキリストの左足部分の掘削痕Iがある。また、教会全体にわたる自然断層の亀裂が確認できる。

半球の形状をした後陣壁は、上部がほぼ天井の位置にいたり、左側壁と同様かそれ以上に壁画の切り出しには困難を極めたに違いない。両側から同時に掘削されたと仮定すると、最初にフリーズ部分が切り離された後、足場を確保しながら上段部分を掘り進め、キリストの両脇にいる聖人、次にそれらの下にいるマンデルラを支える天使の切り出しへと続く。そしていよいよ、もっとも重要なキリストに入るわけだが、これにおいても足場の確保が必要となるので、上半身を先に実施したと想定される。左右の作業班が連携して両側から掘削したようだ。下半身においては、先にキリストの右足部分からおこなわれたとみられる。なぜなら、左からの掘削が、左足部分にあたる掘削痕Eにいたるまで次第に奥行きが狭くなっていることから、左足部分が最後まで残されたと判断できるからである。最後に残ったこの部分に関しては、上半身と同様に左右の作業班によって両側から掘り進められ、鋸切りと思われる切断工具を使用して壁体から切り離された。衣をまとった左足の画像と掘削痕Iの形状がおおよそ一致していることから、画面側から画像の形状を手がかりにして掘削具合を判断していたことが分かる。

註

- [1] ヴァザーリの「芸術家列伝」の再版に収録。
- [2] 宮下孝晴、『フレスコ画のルネサンス：壁画に読むフィレンツェの美』、日本放送出版協会、2001、pp.189-190
- [3] 宮下、上掲書、p.189
- [4] 修復士ロベルト・カリタによる2通の書簡。本書。第Ⅱ部-第1章、p.38、p.50参照
- [5] 「聖マルティヌス」がスタッコ法かストラッポ法のどちらで剥ぎ取られたかは不明であるため、ディスタッコ法という表記には両方の意味を含ませている。
- [6] 1939年のAlba Mediaの研究では助祭ではないかとされている。
- [7] 後陣両隣の壁画が剥ぎ取られた痕を計測すると約13cmの奥行きがあった。工具の刃幅分を差し引くと、画面から厚さ約10cm前後で壁画が取り外されたと想定できる。
- [8] 本書。第Ⅱ部-第1章、p.42のFig.22参照
- [9] 本書。第Ⅱ部-第1章、p.38参照
- [10] 階段状になっている凝灰岩の塊は足場として利用された。掘削は通常足場を確保しつつ掘削は上部からおこなわれた。
- [11] 入口側の4聖人壁画
- [12] これらの亀裂の多くはマッセッロ区分を横切っているもので、壁画移動時に生じたものとは考えられない。
- [13] 本書、計測チームの報告第Ⅱ部-第1章を参照。

パードゥレ・エテルノ教会
後陣壁



右側壁



左側壁



サン・ヴィート・ヴェッキオ教会

後陣壁



右側壁



左側壁

